

定点経年調査による言語変化の解明

阿部 貴人 調査科学研究センター 客員准教授 (国立国語研究所・研究情報資料センター)

1. 鶴岡調査とは

1.1. 統計数理研究所と国立国語研究所の共同研究

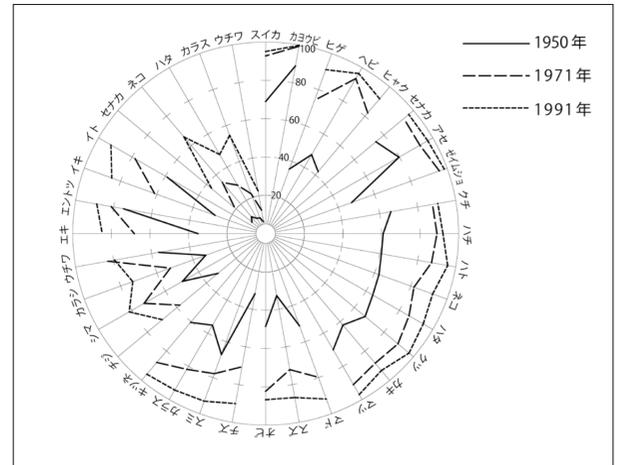
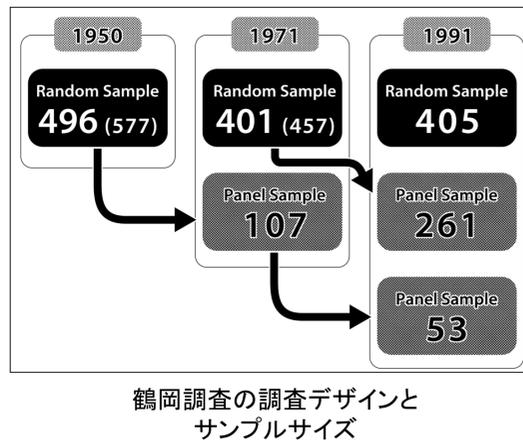
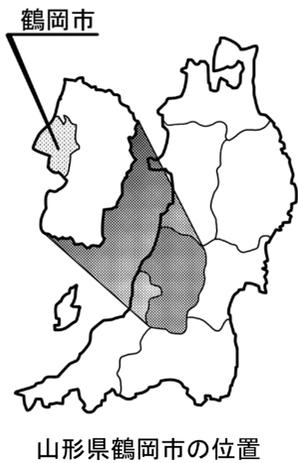
統計数理研究所と国立国語研究所は、1940年代後半から、共同研究で言語の定点経年調査を実施してきた。その1つが、山形県鶴岡市における「共通語化」のプロセスとメカニズムを究明する「鶴岡調査」である。

鶴岡調査は、1950(昭和25)年、1971(昭和46)年、1991(平成3)年の3回にわたって、約20年毎に40年間の言語の変化を追跡してきた。統計数理研究所の研究者とは、第一次鶴岡調査では、林知己夫氏、青山博次郎氏、西平重喜氏、第二次調査では、林知己夫氏、西平重喜氏、鈴木達三氏、林文氏らと連携し、言語の変化を捉えることに加えて、調査方法やサンプリング方法等の開発もトピックとして研究を続けてきた。

1.2. 鶴岡調査の特徴

鶴岡調査の調査デザインは、住民基本台帳のランダムサンプリングによってサンプルを抽出する調査(以下、ランダムサンプリング調査)と、過去の調査に参加したサンプルに再度調査を実施するパネル調査を並行して行ってきた。

ランダムサンプリング調査によって、鶴岡市民の共通語生活とその変容を明らかにするとともに、パネル調査によって、実時間の経過の中で個人の共通語生活がどのように変化してきたかを明らかにすることを目的としている。



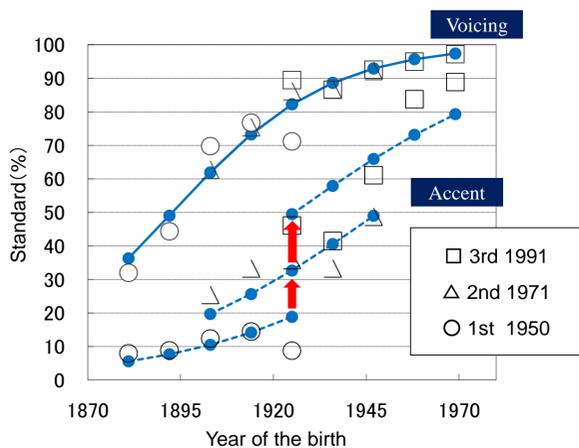
2. 約40年間にわたる発音の変化

調査は面接式で行い、鶴岡市方言の特徴である言語面(特に発音)を焦点とする。

発音に関する項目は、「共通語で話す相手」に対して、どのくらい共通語を使うか(使えるか)といった「共通語運用能力」を調べるものである。調査者が絵を見せ、「カラス」や「ウチワ」等の語彙を回答してもらい、その発音を記録するのである。

言語研究には言語形成期という考え方がある。この時期に習得した言語的特徴が、その人が使うことばを決めると言われている。その年齢・時期には諸説あるが、一般的に、ことばを使い始める時期から10代前半までだと考えられている。この概念は、人が使う言語に大きな影響を与えることがわかっている。例えば、英語圏の子どもはこの時期にLとRの発音を習得するので、それを発音し分けることができる。しかし、日本人が成人になってから英語を学習する場合には、言語形成期に習得していなかったLとRを発音し分けるのが難しいということになる。確かにことばにとって言語形成期は重要なものである。しかし、人は、言語形成期を過ぎてしまうと言語的特徴を習得することができないのか。仮にそうだとすれば、言語形成期に鶴岡市で育ち、一度方言的な特徴を習得した人は、年齢を重ねても方言的な特徴のあることばを使い続けることになるはずである。

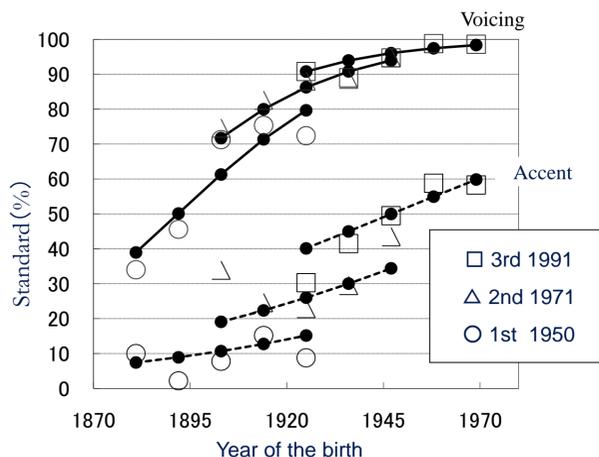
第一次調査時に20代だった人は第二次調査では40代になっている。仮に、人が言語形成期後に言語を習得しない/できないのだとしたら、40代の方が方言と共通語を使う割合は、第一次調査の20代の人と同じであるはずである。そして、「人は言語形成期を過ぎててもことばを習得する」ということを、データで実証することができたのである。



【3回の実測値とロジスティック回帰分析による予測値】

Voicing(有声化現象)
共通語「neko」 - 方言「nego」

Accent(語のアクセント)
共通語HL - 方言LH



【3回の実測値とロジスティック回帰分析による予測値】

Voicing(有声化現象)
共通語「hata」 - 方言「hada」

Accent(語のアクセント)
共通語LH - 方言HL/LL

第四次調査に向けて

これまで通りに約20年間隔で実施するとしたら、第四次調査は今年(2011年)ということになる。第四次調査によって、60年間にわたる言語変化のプロセスとメカニズムに迫ることができる。

統計数理研究所と国立国語研究所は、半世紀にわたる共同研究の実績を活かして、知見・資源・技術・人的連携をさらに強化し、実時間の経過を踏まえた言語変化の解明、変化研究の方法論的確立を目的に、第四次調査にむけて計画を進めている。

言語変化に関する理論・モデルの導出、社会調査型の言語調査の教育・普及、回答データ等の研究リソースを研究者コミュニティに提供することによって、社会調査および言語研究のそれぞれの立場で、調査研究のハブ機能を果たすことを目指す。